

初期一中節語り物考

—語り物分類及び段物集、歌謡集に所収される段物、端物類考—

小俣喜久雄

1. はじめに

一中節とは江戸時代中期に初世都太夫一中が京において語り出した浄瑠璃の一流派であり、現在でもなお伝承されているものである。初世都太夫一中当時の初期一中節の語り物は、丸本や段物集などに収載のものをあわせると凡そ百曲がある。その内の丸本八編は既に拙編著『一中節の基礎的研究 第一巻 正本集』¹において影印編、翻刻編に書誌解題を付し集成した。更に段物集に収載される語り物約九十編は、「〔翻刻〕一中節の語り物（一）～（三）」²に集成した。

本稿では先ずそれを丸本物、端物・段物、また時代物、世話物等の視点から分類し、その後、下記分類に沿いながら段物集、歌謡集に所収される段物、端物類について考察を加えたい。なお、語り物頭部に番号のあるものは、拙稿「初期一中節段物集成立小考」³末尾掲載「一中節段物集所収作品版式比較表」及び上記、拙稿「翻刻 初期一中節の語り物（一）～（三）」の通し番号と一致する。

¹ 諏訪春雄・小俣喜久雄、『一中節の基礎的研究 第一巻 正本集』、東京：勉誠出版、1999.01

² 小俣喜久雄、「翻刻 初期一中節の語り物（一）」、『東洋大学大学院紀要第36集』、(2000.02) 143-167. 転載 『国文学年次別論文集』2000年版近世分冊、(2002.07) 668-680

小俣喜久雄、「翻刻 初期一中節の語り物（二）」、『東洋大学大学院紀要第37集』、(2001.02) 233-252. 転載 『国文学年次別論文集』2001年版近世分冊、(2003.09) 588-598

小俣喜久雄、「翻刻 初期一中節の語り物（三）」、『東洋大学大学院紀要第38集』、(2002.02) 359-376. 転載 『国文学年次別論文集』2002年版近世分冊、(2004.09) 601-610

³ 小俣喜久雄、「初期一中節段物集成立小考」、『東洋大学大学院紀要第32集』(1996.03) 83-103 この通し番号を付した語り物の配列は原則として段物集収録順である。また同一の段物集間での語り物の配列は目録順とした。またその数字の流れは推定成立時期の古い段物集から新しい段物集へと数を増すものである。

参考までに丸本物に関する考察は、既に「一中節丸本『伝授小町』考一角太夫節『七小町』との比較を中心に」⁴、「一中節丸本考—他流派の語り物を改題改訂して成った丸本—」⁵の拙稿二編がある。

2. 語り物分類一覧（丸（正）本（含む絵入狂言本））

2.1 オリジナルと思われるもの

2.1.1 時代物

- a 『伝授小町』（内題『当流小町』）
- b 絵入狂言本『巖嶋姫滝』（節事部「6 てつとう仙人四季山めぐり」、「7 姫瀧水の上風流」（両語り物について宝永六年(1709)二の替り以降、京布袋屋座「巖嶋姫滝」上演時の絵入狂言本（内題「上 巖嶋姫滝 水がらくり 都太夫直正本」）あり。）

2.1.2 世話物

- c 『八百屋お七物語』（道行部「13 八百屋お七枕びやうぶ道行」）
- d 『助六心中後日』（道行、節事部「22 助六あげ巻二度心中道行」、「59 進上物ぞろへ」）

2.2 他流派の語り物を利用したもの

2.2.1 時代物

〔A 古浄瑠璃より〕

- e 『勇士の三つ物』（典拠山本土佐掾『源氏蓬萊三物』（元禄三年(1690)頃カ))・節事、道行部「2 なら八けいさくらづくし」、「3 ゆうし三つ物姫君道行」
- f 『けいせい大和絵姿三幅対』（丸本『けいせい大和絵姿三幅対』・宇治加賀掾『愛染明王影向松』（元禄末～宝永初頃カ(1700頃))・道行部「40

⁴ 小俣喜久雄、「一中節丸本『伝授小町』考-角太夫節『七小町』との比較を中心に-」、『楽劇學 12号』（2005.03）18-31

⁵ 小俣喜久雄、「一中節丸本考-他流派の語り物を改題改訂して成った丸本-」、『歌舞伎 研究と批評 38号』（2006.12）

三幅対政方はちたゝき道行」

〔B 当流浄瑠璃より〕

g『子の日松』(出典竹本義太夫『雪女』・元禄五年(1692)正月・竹本座)・道行、節事部「18 しのゝめ道行」、「30 ほうらい山まつづくし」

2.2.2 世話物

h『助六心中并せみのぬけがら』(出典山本土佐掾「万屋助六」(元禄十三年(1700)以前カ)そのもとは義太夫節竹本内匠利太夫『大坂すけ六心中物語』)・道行部分「4 助六心中道行」

i『椀久末の松山』(出典(紀海音作豊竹若太夫『椀久末松山』(宝永七年(1710)正月頃カ・豊竹座))・道行部分「12 わん久きやうらんの道行」

3. 語り物分類一覧(段物集、歌謡集に所収される段物、端物類(正本の道行、節事部分は除く))

3.1 オリジナルと思われるもの

3.1.1 世話物

27 しゆしやか心中嶋づくし道行

71 吾妻歌七枚起請八百屋お七道行(富松薩摩『吾妻歌七枚起請』正本の下巻)

3.1.2 暦浄瑠璃

15 庚寅たからごよみ(詞章曲節不明)、20 辛卯福德暦、

31 みつのとみ末広こよみ(詞章曲節不明)、64 甲午年玉福貴暦

3.1.3 土産浄瑠璃

45 千ト江戸みやげ月見の船、46 傾白末社名よせ(45 「千ト江戸みやげ月見の船」後編)、(48 有馬みやげゆな紋づくし)、

49 越路みなと女郎名よせ浮世まんざい、77 江戸八けい名所づくし

3.1.4 遊里歌等

- 11 評判のおみつ
紙屋喜兵衛 合逢から傘三本足道行、21 和泉しきぶ哥枕づくし、
26 けいせいしのぶ草、47 石垣色すだれ新名よせ、
50 祇園のうれん茶屋名よせ、51 石垣風流茶屋名よせ、
52 都ふろ屋の名よせ、53 都のいぬる色すだれ、
56 色はたけはらみわかな、58 好色湯山八景（菅野宇太夫作）、
60 しきつの浦大みなと風流町づくし、66 北野あんどろ平野八けい、
76 都の辰巳四季のけい、80 あぼし色あんどろ

3.1.5 詞章曲節不明

- 14 かるためぐり、16 四条やく者めぐり、17 三まいめぐり、
19 しゆきやうねん仏、32 らくやうくはん音めぐり、
33 なん女一代八けい、34 女中ふうそくづくし、
35 みやこあきんと町廻り

3.2 他流派の語り物を利用したもの

3.2.1 時代物

〔A 古浄瑠璃(宝永以降の富松薩摩なども含む)に依っているもの〕

- 44 手枕曾我かまくら八けい（出典未詳）
54 大和哥五こくしきし 小町少将道行（清水三郎兵衛作宇治薩摩『大和歌五穀色紙』（正徳三年(1713)秋頃カ・宇治座）
63 ひみつのごま ときはぎ道行（『声曲類纂』の「加賀掾並門弟の語りし浄瑠璃目録」中に「秘密護摩」（内容及び詞章不詳）有り（岩波文庫 94 頁）。出典カ）。
69 源氏十二段 長生殿庭の四季、（井上播磨少掾「十二段 四季の段」（延宝二年(1674)春刊段物集『忍四季揃』所収）およびその改作の宇治加賀掾「四季の段」（延宝五年(1677)刊『天狗内裏』第三）の詞章を主に借り、末尾等に近松門左衛門作竹本義太夫「長生殿四き」（元禄十一年(1698)正月以前カ『十二段』第三・竹本座）の詞章を若干利用している。

- 72 八千代の玉垣 なをしの前みち行（富松薩摩『山王権現八千代玉垣』
（享保元年(1716)秋以降、享保四年夏頃まで）の道行「なをしのまへ
道行」は詞章曲節とも一中節のものとほぼ合致する。道行以外の部
分の節付は、富松薩摩の所謂、宇治座系の節付である。このことか
ら本語り物は、71『吾妻歌七枚起請』と同様に道行部分のみ一中が
語ったものと思われる。宇治一派の太夫は上之巻冒頭の節事「風流
鳥さし」と下之巻の節事「をんりやうの段」に聞かせ場が設けられ
ており、中之巻は一中節を聞かせる趣向としたのではないだろうか。
なお道行後の詞章に「村山平十郎が口まねをうつすよふうつすうつ
しもうつす阿波太夫節……」との一説がある。阿波太夫は岡本文弥
の高弟で、一中も含め、すべて出羽座系の太夫で、曲節も近しい部
分があったと思われる。ゆえに薩摩浄瑠璃の道行部分は一中ではな
く阿波太夫が語った可能性も推定できなくはないが、未詳。おそら
く『吾妻歌七枚起請』と同様に一中が語ったと思われる）。
- 73 念仏往生記 きよひめ道行（宇治加賀掾『念仏往生記』（本曲は元
『大原問答』と呼ばれ、その刊年は延宝六年(1678)と推定されてい
る）。
- 74 釈迦八相記 しゃのくどうじ道行（管見では説経節天満八太夫『し
やかの御本地』（元禄八年(1695)～宝永頃(1704)刊か。江戸板）四
たんめの詞章と共通する部分もつともおおい。現存する古浄瑠
璃『しゃか八さう記』（寛文九年(1669)七月刊）には同様の道行は
ない）。
- 75 誓願寺本地 けしこく道行（古浄瑠璃『誓願寺本地』・寛文八年(1670)
十月）
- 91 人丸姫道行（松本治太夫『鎌倉袖日記』・元禄六年(1693)）
〔B 当流時代浄瑠璃に依っているもの〕
- I 近松物
- 28 五たん曾我兄弟かたみ送り（『曾我五人兄弟』・元禄十二年(1699)カ・
竹本座）
- 29 げんぶくそがしゆすびん（『曾我五人兄弟』・元禄十二年(1699)カ・竹

本座))

- 39 こもち山姥らいくわう道行(『嫗山姥』・正徳二年(1712)九月以前カ・竹本座)
- 41 天智てんわう美人ぞろゑ(『天智天皇』・元禄四年(1691)五月十一日以前カ・竹本座)
- 42 用明天わう舟路の道行(『用明天王職人鑑』・宝永二年(1705)十一月カ・竹本座)
- 43 大君花てる姫道行(『天智天皇』・元禄四年(1691)五月十一日以前カ・竹本座)
- 79 出世の鉢木西明寺道行(竹本筑後掾『最明寺殿百人上臈』・元禄十二年(1699)三月頃カ・筑後掾正本に先立ち加賀掾正本が存在した)
- 82 酒呑どうじ頼光四天王道行(『酒呑童子枕言葉』・宝永七年(1710)五月五日以前カ・竹本座)
- 86 ふた子すみだ川 狂女道行(『双生隅田川』・享保五年(1720)八月三日・竹本座(宝暦版『外題年鑑』))

II 近松以外

- 36 ふつきそがすけ時宮めぐり(竹本筑後掾『富貴曾我』・元禄十一年(1698)正月以降六月十五日以前成立カ)
- 37 富貴曾我五月御前道行(竹本筑後掾『富貴曾我』・元禄十一年(1698)正月以降六月十五日以前成立カ)
- 38 じねんこじ二ゐの前道行(竹本義太夫『自然居士』(元禄三年(1690)正月十四日~同十年(1697)七月二十五日カ・竹本座)
- 55 平安城わかばの前道行(紀海音作豊竹若太夫『平安城細石』・正徳五年(1715)春頃カ・豊竹座)

3.2.2 世話浄瑠璃

I 近松物

- 65 清十郎おなつかさ物ぐるひ道行(竹本筑後掾『五十年忌歌念仏』(宝永四年(1707)七月十四日以前・竹本座)
- 78 大きやうじおさん死出の道行(『大経師昔暦』(正徳五年(1715)春カ・

竹本座)

- 87 かうや心中 久米之助おむめ道行(『心中万年草』(宝永七年(1710)四月八日・竹本座(『鸚鵡籠中記』))

II 近松以外

- 62 あかね半七笠や三かつ心中道行(『三勝心中』 蔦山四郎兵衛作(歌謡集刊『落葉集』(元禄十七年(1704)所収))
- 67 (椀久狂乱)同下のまき十徳六方(丸本『椀久末の松山』・出典(紀海音作豊竹若太夫『椀久末松山』(宝永七年(1710)正月頃カ・豊竹座))

3.3 替え歌(5を除く、左記のすべての曲が「6 てつとう仙人四季山めぐり」の替え歌と思われる)

5 助六かわり道行、

8 かはり山めぐり(色道仙人茶屋めぐり) 都太夫一中正本)、

9 諸国見せ物めぐり(詞章未詳)、10 京三十三所観音めぐり、

23 みやこ大めぐり、24 四きの鳥めぐり、25 さけ山めぐり

3.4 半中作と思われるもの

I 近松物

- 81 山崎与次兵衛あつま道行(『山崎与次兵衛寿の門松』・享保三年(1718)正月二日・竹本座(宝暦版『外題年鑑』))
- 83 けいせい三度笠相合かご道行(竹本筑後掾『冥途の飛脚』・正徳元年(1711)七月以前カ・竹本座)
- 84 与作小まん夢路の駒 都半仲(竹本筑後掾『丹波与作待夜のこむろぶし』・宝永四年(1707)末カ・竹本座)

II 近松以外

85 しまお七 かちまくら

3.5 その他

68 松のうち 御嘉儀(河東節『松の内』・享保二年(1717)二月十七日・

市村座「傾城富士高根」)

3.6 出典未詳

3.6.1 時代物

1 かぐら高砂しのぶ姫道行、61 吉日よろひ曾我とらうきな川、
70 怨霊曾我 ふねづくし

3.6.2 世話物

57 笠や三かつ下のだん

4. 段物集、歌謡集に所収される段物、端物類考

4.1 はじめに

前項、第「3」項「語り物分類一覧（段物集、歌謡集に所収される段物、端物類（正本の道行、節事部分は除く））」に挙げた語り物について、本項で検討を試みたい。初期一中節の段物、端物類はおよそ九十曲ある。これらの分類は先の「一覧」で挙げたとおりである。その内、語り物の多くの部分を占める「3・2 他流派の語り物を利用したもの」は、時代物、世話物、古浄瑠璃、当流浄瑠璃を問わず、ほぼ原拠となった語り物と同様の詞章をそのまま利用している。暦浄瑠璃や土産浄瑠璃など興味を惹く語り物がある「3・1 オリジナルと思われるもの」については、版本の刊行時期、初世一中の活動（拙稿「初期一中節段物集成立小考」⁶、拙稿「初世都太夫一中の初回江戸下り」⁷等）などを考察する際、活用したが、こと内容研究に関しては未だ有効な方法は見出せていない。さらに「3・3 替え歌」についても同様である。そのような中で可能な限り原拠との詞章比較をした結果、以下の五曲について特徴的な部分を見いだすことが出来た。よって、以下、それらについて考察をおこなう。なお「段物、端物類」の内、

⁶ 注3論文に同じ。

⁷ 小俣喜久雄、「初世都太夫一中の初回江戸下り」、『演劇研究会会報第26号』、(2000.06) 3-15

せめてみらいのくろ日をのがれ。二季の彼岸にいたらんと念し給へ
や

3 下キン なむあみだ。なむ阿弥陀ぶを帆にあげて。ともにくぜいの船のりよ

し。ぐれんの井戸ほりせうねつの。地ごくのかまぬりよしなやとい

そがぬ。道を。いつのまに。こゆる我身のしでの山しでの。田おさ

の。田がりよし。野べよりさきを見渡せば。

過し冬至の冬がれの。木の間／＼にちら／＼とぬき身の鏝の恐し

や。あれてそなたの身をつくか。是でそもじを殺かや。ちいみも

今はいつはりと。二人は顔を打合せ。くどきこがれて泣涙馬の尾か

みやひたすらん。またさへ返る。夕嵐雪の松原此世から。かゝるく

げんにわうもう日。島田乱れてはら／＼／＼顔には。いつのはんげ

しやう。しばられし手のつめたさは。我身一つの寒の入。涙ぞゆび

の。つめ取よし袖に氷を。むすびけり。

4 スエテ つく／＼物を案ずるに。我は劍の金性の。刃にかゝる約束か。

ワキ つち わしは土性はかの土。何とてはかにうづまれず。ついに木性の木の

ワキ シテ 二人 ナラスハル
空に。かばねをさらし。名をさらし。なんと小歌につくられて。つ

ハル ヲントウ
よきおきめにあはたぐち。けあげの水に名をながすおさん茂兵衛が
あらせうりやう。

はづ
恥かしながらたむけ草。おなじぎいくはの下女か名の。玉はめいど

ハル
に通へ共。こんはく此世にとゞまつてともうき名はくだす共。め

しうじゆ
いどは主従一所にてしやばて手なれし玉がわざ。むけんのかまで

フシ
茶をわかし。ゆきゝの人の。ゑかう請。我身のさとり。ひらく日。

ウ ハル
ア、なげくまし今更に。何くよ／＼とくへ日の。悔むもよしな引よ

ハルフシ 中 ハル
せて。むすへば露の。命にてとくればもとの道しばに。やがていの

トル 上
こや五里六里十しも過て是ぞ此小川通は三づの川。

5 ろう ウ うはさ
籠の町さへ近付は見物くんじゆとり／＼の。こよみが噂くりかへ

よめ むかし
す思へはわしが嫁取よし。我が昔のげんぶくよしの日とりもよし

あし キン 系
や芦にさぎ。すそのもやうも絵にうつし。筆につらねて末の世にか

三重
たり。つゞけて聞及ぶ。

〈一中節〉

はしらこよみ
 大きやうじ 柱曆 おさん 道行

1 ^{かんおし} つるにゆく。道とはかねて。^地 聞しかど。けふの我身のさいご日は。

^地 我のみきゆる心地して。^{ウ長地} あまたの人の命ごひ。それをつゑともはし

ら共。^{はる地} はしらこよみの中だんに。^{はる地} むこどりよしとかきたるは。^ウ あた

^入 のはじめかやれごよみ。^地 かみのつぎめもはら／＼とないて。^{替り小おくり} 出し夜

の。^{大坂さいもん} うき身にも。いつか此世に金神と。^{はるふし} 思ひまはせばむねせかれ^引

^{ウ地} 八十八夜及びなき年は十九と廿五のなごりの霜と見あぐればそら

にしられぬ露なみだ。十方ぐれに道見へずなく／＼ひかれヨヲ、ゆ

く^ウ 涙よその見るめもあはれ成。^{一つつきゆり} 人めぬすみてあらはれて。^地 ふぎとは

なんのかのへさる。^{かん地} しらでおふ夜の其むくひ世の口のはにうたわれ

て。^地 丸のおごけにうみためし。^{ウ地} まをのひねりそ身の上は。^{色長地} 見へず水

なわしばりなわ世にそしられん情なや。

4 つく／＼物をあんずるに。^{すへふし} われはつるきの金性のヲやいばにかゝる^{二上りたゝき二人}

やくそくか。^{ワキ} わしは土性はかの土。^{シテ} 何とてはかにうづまれず。^{ワキ} 終に

^{シテ} 木性の。^{二人} 木のそらにかばねをさらし名をさらし。^{シテ} おんど小哥にうた

- われて。^{ワキ}つよきうきめにあわた口。^{二人よみうりふし}けあげの水に名をながすおさん
茂兵へが後の世をたすけ給へや
- 3 なむあみだ。^{シテ}なまみだぶつなむあみだ仏なむあみだ。^{シテ}みだの六字を
ほにあげて。^{ワキ}友にくぜいの舟のりよし。ぐれんの井戸ほりせうねつ
の。^{引 てうし上ル}地ごくのかまぬりよしなやといそがぬたびぢいつのまにしでの
たをさの。^{引取}田かりよし^引のもりが見るめはづかしや。^{ゆりつきゆり}
- 2 ^地あれふき物とあやぶ日。^{いる地}終に命をほろぶ日。^{ウ地}思へば天一天上の五す
い八せん。^ウま日もなし只何事も
- 5 夢の世と^{色地}我身のさと^{くり上}りひらく日ひつじのあゆみ隙もなくはやさい
ごばもちかづけば。^{ヲトルふし}見物くんじゆとり／＼に。ふたりがうわさよし
あしを。筆につくしてすゑの世に。かたりつゞけて聞およぶ

義太夫節、一中節の引用部の段下げ部分は、義太夫節部分では一中が詞章を取り入れなかった所をほぼ示し、一中節部分では一中のほぼ独自の詞章部分である事を示す。

上記の引用詞章を比較すると、近松作義太夫節では1 2 3 4 5の詞章順が、その詞章を利用した一中では1 4 3 2 5と、冒頭語り出しの1と最終部分の5の部分のみ省略改訂をやや加えながらもそのまま取り入れているのに対して、その間は4と2を入れ替えただけにもかかわらず、近松の原作とは随分印象がかわったような感じをうける改変がなされている。

一中は近松作の美文を巧みに応用して本曲を作り上げている。元が近松作義太夫節ということで聴衆には知れ渡っていた語り物であるから、特に語り出しの詞章順を変えなかったことは、近松作とのアイデンティティーを保てる所から、観衆に聞き知った詞章の語り物という印象を与え、語り上げまで興味深く聴かせる効果があったのではなかろうか。その中で途中の順序を入れ替えることは、逆に一中のオリジナリティーを出すことともなり、聴衆は聞いたことがある詞章でとっかかりを作られ、中心部で新鮮味を感じさせる詞章が満喫できるという巧みな手法である。現在の視点から見れば小手先のテクニックではあるが、聴衆を満足させるには労少なく益多しといううまいやり方だと思う。同様の手法はつぎの「山崎与次兵衛あつま道行」にもみられる。

4.3 「山崎与次兵衛あつま道行」(通し番号 81) 考

本語り物は近松門左衛門作義太夫節『山崎与次兵衛寿の門松』(享保三年(1718)正月二日・竹本座(上演時期は宝暦版『外題年鑑』による))の道行部分の詞章を利用したものであり、一中の弟子の都半中が節付した語り物である。同様に両者の詞章を引用し、相異部分を指摘する。

〈近松門左衛門作義太夫節『山崎与次兵衛寿の門松』⁹⁾〉

与次兵衛あづまみち行 下巻

a ^{歌ハル}春にそだつも花さそふ。^中てふはなたねのあぢしらず。なたねのてふ

は花しらず。しられすしらぬ中ならば。^ウうかれそめまひ。^ウくるふま

^{ナラス}ひ物あぢきなや。^{地色ウ}あつま立より

※a 一中3部分が冒頭にくる。

b ^{うれ}ヲ、嬉しやお心もしつまつたか。^{ハル 色}アレ御らんぜよむしでさへつかひ^詞

⁹⁾ 近松全集刊行会編『近松全集 第十巻』収載『山崎与次兵衛寿の門松』、東京：岩波書店、1989.02.

はなれぬあげはのてふ。我々も二人づれすいなどうしの中々に。お心よはやといさむれば。

※b 一中2部分に相当。

- c あづまうけだせ山ざき与次兵衛。うけだせ／＼山ざき与次兵衛。いつか思ひのナ下ひもとけて。むかし思へはうやつらや。うやつらやしのぶむかしもうやつらや。情なやたれ有ふ山ざき与次兵衛様とて人々に。おくれぬかみのみだれ心あづまが顔も見わすれて。うつゝなやとせいすれば。そなたは藤屋のあづまかの。(後略)

※c 一中1部分に相当。

〈一中節〉

ねびき かとまつ 山崎与次兵衛 道行 都半仲
 寿 の門松 藤屋 あづま

- 1 ^{ニ上り}あづま ^{キン}請出せ山ざき与次兵衛。請だせ／＼山ざき与次兵衛いつかおもひのナ下ひもとけて。むかしおもへばうやつらや忍ぶむかしもうやつらや。^詞情なやたれあらふやまざき与次兵へ様とては。人におくれぬ乱れがみ。あづまが顔も見わすれて。うつゝなやとせいすれば。
^{太夫}そなたは藤屋のあづまか。
- 2 ^哥ヲ、うれしやな。あれあれを見やむしさへも。つかひはなれぬあげはのてう。我々とてもふたりづれ。すいなどふしの中／＼に。
- 3 はるにもそたつ花さそふ。なたねはてうの花しらす。^地てうはなたねのあぢしらす。^地しらすしられぬ中ならば。うかれまい物さりとは。
^{ハル地}くるふまいものあじきなや。

なお右記の引用部は作品の冒頭部であり、3部分以降の語り物の中盤から後半部分では一中に省略が目立つが、近松の詞章順と同様である。

本語り物では先に検討した「大きやうじ 柱暦^{はしらこよみ} 道行^{おさん}」で、近松作と冒頭語り出しの部分の詞章順を変えずに、ほぼそのまま利用していたのに対して、冒頭より詞章順を入れ替えている。本作は一中の弟子の半中が手掛けたものであるが如何なる作意があったのか、検討したい。

さて一中節が1部分に「あづま^{ニ上リ}請出せ山ざき与次兵衛。請だせ／＼山^{キン}ざき与次兵衛～」と、俗謡にもうたわれていた「山崎与次兵衛踊」を冒頭に持ってきているのは、語り物を聞かせる際によりインパクトが強くなる手法となろう。義太夫節では近松は作品全体の一部として道行部分も描いているが、一中節ではその道行部分のみの活用であるために「山崎与次兵衛」の世界を語り出しと同時によりつよくあらわしたかったのだろう。「山崎与次兵衛踊」は、既に元禄十七年(1704)刊(京都)歌謡集『落葉集』に所収されており、巷間に知れ渡っていたもので、近松もそれから取り入れたとおもわれる。巷で周知の俗謡を、語り出しに据えることは別段特殊な手法とも言えないが、聴衆へのアピールは格別であったろう。このあたり半中の才がうかがえる。ただcの網掛け部分「おくれぬかみのみだれ心」は、その前後も含めた意味が「山崎与次兵衛様とって、人々におくれはとらぬ人であったのが、おくれ髪かみの乱れたように心も乱れ、吾妻の顔も見忘れて¹⁰」となるのだが、一中の1「人におくれぬ乱れがみ。」では「山崎与次兵衛様とって、人々におくれはとらぬ人であったのが、おくれ髪かみの乱れたように」までの意味となってしまう、「心も同様に乱れて、吾妻の顔も見忘れる」という「心が乱れる」という部分が導き出せなくなってしまうので、詞章の内容的つながりからは、良いものとは言いかねる。半中は「みだれがみ」という語句を使用したく、また語調も良いところからの改変かと思われるが、この

¹⁰ この部分の口語訳は『日本古典文学全集 44』、鳥越文蔵校注・訳『近松門左衛門集 2』収載『山崎与次兵衛寿の門松』、東京：小学館、1975.08 による。

あたり近松の厳密な詞章に対して、若干の内容的不備よりも語り口に重きをおく半中の嗜好がうかがいしられる。

結局、本語り物で冒頭から詞章順を入れ替えたのは、俗謡で周知の「山崎与次兵衛踊」をより一層、効果的に使用したかったからであろう。

また義太夫では節付が、a部分が「歌」→b部分が「詞」→c部分が「歌」となっており、コントラストの映えるようなものとなっている。一方一中節では、1の部分が冒頭に「二上り」とあり、これは二上り歌のことと思われるので、義太夫同様、「歌」による語り出しである。ただ2の部分も「哥」であり、表記されている曲節から見ると3の部分も「地」とあるところから「詞」は用いられておらず、すべて旋律のある節付となっている。これは一中節の方が端物として、語り物全体を歌的なものとして聞かせようとする狙いがあったからではないだろうか。義太夫節のようなコントラストを描くのも妙で、評価に値するものであるが、半中の節付も節事を得意とする初世一中の節付の流れを、肯定的に受け継いだものともおもわれる。なお同様の例は「かうや心中 久米之助おむめ道行」でも確認できる。

4.4 「かうや心中 久米之助おむめ道行」(通し番号 87) 考

本語り物は近松門左衛門作義太夫節『心中万年草』(宝永七年(1710)四月八日・竹本座(『鸚鵡籠中記』))の道行部分の詞章を利用したものである。両者の詞章を引用し、相異部分を指摘する。

〈近松門左衛門作義太夫節『心中万年草』¹¹⁾〉

久米之介お梅道行

歌
まぼろしや。アぢやうごうの。かぎりとはいかに。いかなるしや

下
ばやらん。世は何の。たとへぞや。あひそめてはやみとせ。かけ

ユリ
ばかりの。ちぎりにて。

¹¹⁾ 近松全集刊行会編『近松全集 第五巻』収載『心中万年草』、東京：岩波書店、1986.07.

1 ^{ハル} つまはのなかのひとつるど名は。のちの世の^{ユリ}。かたみかや。のこす^下

^{フシ}かたみはおやのため。

2 ^{中ウ} 我はそさまのまへがみの。ながき来世もわしが此なをさぬひたひ^ウ

此まゝで。見たり見せたり六道の^ウ。つちの^{フシヨクリ}。ちまたは。おほく共^{ハル}

^{フシ}はぐれまいぞと。夕月は。はやいりはてゝふけわたる。^{中ウ}

3 まだきさらぎのやへがすみ。かくれしのぶによけれ共^{スエテ}。かほが見^{キン}

にくのおぼろよやふたつ^{ヨクリ}。よいことあらしふく

4 木の下つゆのたまがはの^地。どくのしづくもふるならば。身にきづ^{ハル}

つけずし^ウにたやとかほとかほとをすりよせてこぼす涙はをのづ^中

から。たがひの口につたひ入^ウ。まつごの水となりけらし。(後略)^{中フシ} ^{ハル}

〈一中節〉

^{かうやまんねんさうくめ}
高野万年草久米の介心中

おむめ

^{二上りうた} おんなきらやるかうやアの^{あいにて} / \ やまへなぜにめまつは。はゆるぞや。^{合手}

^{あいにて} あきのたをさの。^{あいにて} なみだのあめよともになみだの。^{あいにて} おとしみづ^{あいにて}

- 3 ^{なをす地 きさらき} まだ二月の八重かすみ。^{はる地}かくれしのぶによけれども。ア、かほか
- ^入見にくのおぼろよや。^{はる地}二つよい事あらしふく。^{かんふし}はなのさかりもこよ
ひかきりと見わたせば。
- 1 ^{地うく} つまは野中のひとつ井戸名はのちの世の。^{をとし地}かた見かや。ついをとさ
れてちごさくら。
- 2 ^{はる地} われはおまへのまへがみの。^{うく}ながきらいせもわしが此。^{なをさぬひ}なをさぬひ
^{たゝきワキ}たひ此まゝに。見たり見せたり六だうの。みちのちまたはおほくと
^{太夫}も。^{はくれまひぞとゆふ月}は。^{ワキ}はやいり。^{太夫}はてゝふけわたり。
- 4 ^{つきゆり} 此したつゆのたまかは^{のる地}をはつくどくちとくむならば。^{中地}身にきづつけ
^{長地}ずしにたやと。^はこほすなみたは^{長地}をのづから。たがひのくちにいりつ
^入どひまつごのみつとなりけらし。(※後略。なおこのあとは一中の
省略が多く、また改訂もやや認められるが、詞章順はそのままであ
る。)

右記のように「かうや心中 久米之助おむめ道行」でも、原拠となつた近松の詞章順1 2 3 4を3 1 2 4と入れ替えている。一中正本では上記の主だった改変箇所は冒頭から中盤辺りまでで、その後は近松作を省略しつつ語順をそのままに活用している。前半の部分でとくに入れ替えようとすることは、近松作義太夫節と同様の詞章をもちいながらも観衆に新鮮味を感じさせる詞章で、義太夫とイメージが重ならないようにしたいとする配慮があつたからだろう。このあたり、前の「大きやうじ

はしらこよみ
柱暦 おさん 道行」とは改訂の方向を異にする部分である。ただ本作も含めた、これまで引用の三作はすべて近松作を原拠としており、その美文を活用するなかで自派独自の新味を出そうと工夫が凝らされている点は一致する。本語り物でも、近松と同様の美文をものすのは大変だが、小手先の工夫で、義太夫と一中という根本的な節の相異もさることながら、あらたな「高野心中」の浄瑠璃と、聴衆に印象づけるねらいがあったのだろう。

4.5 「けいせい三度笠相合かご道行」(通し番号 83) 考

本語り物は近松門左衛門作義太夫節『冥途の飛脚』(正徳元年(1711)七月以前カ・竹本座)の道行部分の詞章を利用したものである。以下に両者の詞章を引用し、相異部分を検討する。

〈近松門左衛門作義太夫節『冥途の飛脚』¹²⁾〉

謡クセ
すいちやうかうけいに。枕ならべしねやのうち。(中略)しんみのめ

をとあひ。頼 ^{ハル} ^中 まば願ひかのえさる。かうしんだうよとふしおがみ。 ^{フシ} ^{スエテ} ^{ハル}

^上
ふりかへり見る。しやうまんの(※語り出しよりここまではほぼ一中正本にそのまま取り入れられている。)

1 ^{ノル} ^中 ^{ハル} ^中
あいぜん。様にあいきやうを。いのるしばるの子共衆や。だうとん

^ウ
ぼりの色々やなれしくるわのそれぞとは。もんで覚しちやうちんの

中にはかなやつち屋内。此もつかうに打そひてわたしが紋の松かは ^{ハル} ^ウ ^ウ

の。松のちとせをいのりしに。さだめぬちぎりちやうちんのきゆる。 ^{キン} ^{ヲクリ}

¹²⁾ 近松全集刊行会編『近松全集 第七巻』収載『冥途の飛脚』、東京：岩波書店、1987.11.

命^ウの夕へには此紋付^ウて我中^ウの。経^{フシ}かたびらとくはんねんし。めいど^{地中ウ}

の道^{ハル}を此様に手をひかふぞやひかれふと。

又取^ウかはしなく涙袖^ウのこほりととちあへり。

- 2 たがせきすへぬ道^{キン}なれどとひ／＼ゆけばはかゆかず。今朝の姿を其
なりに すあしにせきだしみづけば。空にみぞれのくもりあられ。

まじりに吹木^ウのは ひらり^{ハツミ}。ひら^{フシ}のに行かゝり。

こゝ^{ハルフシ}はしる人。多ければ。こちへ／＼と袖^ウおほひ。里^ウのうら道^ウあぜ

道^{セツユリ}をすぢりもちりて 藤井寺^{ハルフシ}。あれ^中／＼あれを見や。どこのゐなか
も恋の世や。

- 3 せどになをつむ十七八^歌が門^{ハル}に立たは忍びの妻かゑ。野風^中身のどくこ
ちはいらしやんせゑ

よそのむつごと^{ノルハル 中}。ねたましく^{フシ}。それ覚えてかいつのこと。かの初雪^{地ハル}

の朝ごみに^ウ。ねまきながらにをくられし大門口^ウのうすゆきも。今ふ

る雪^ウもかはらねどか^{フシ}はりはてたる身の行衛。

- 4 我故染^ウて。いとほしやもとの白地^ウをあさぎより。恋はこんだの八ま

んにきしやうせいしの筆^ウのばち。そなたをよけてと泣涙^{歌キン}しばし。

ならぬ。^{はねはつみふし}何くど／＼と思ふぞや。是ぞ一れんたくしやうと。なぐさ

みつ又なぐさみに。^{はる地}ひよくきせるのうすげふり。^{ウ地}朝出のしづや火を

もろふ。^{つなきふし}のもりが見るめ恥かしと。^{色地}籠立させて隙をやる。あたへの

露の命さへ。^{引取}をしからぬ身は。おしからず。猶もをしまぬ。かちは

だし。^{すへふし}をしむはなごりばかりぞや終にきなれぬわたぼうし。^{二上りたゞき}^{太夫}わしか

かほよりこなさんの。^{ワキ}はだに是をと風ふせぐひらりぼうしの。^{太夫}^{ワキ}むらさ

きや。^{二人}色であいしははやむかし。^{太夫}けふはしん身のめをとあい。^{ワキ}たのま

ば願ひかのへさる。^{二人うたかゞり}かうしんどうよとふしおがみ。跡ふりかへれば

しやうまんと。

(この間は原拠となった近松の詞章省略・1の部分)

又取かはしなく涙。袖の氷と。とぢあへり。

(この間は原拠となった近松の詞章省略・2の部分)

^{本調子}爰はしる人おほければ。^{ウ地}こちへ／＼と袖おほひ。里のうら道あぜ道

をすじりもちりて藤井寺。あれ。あれを見や。^{替七つゆり}^{いなか}どこの田舎も恋のよ
や。

(この間は原拠となった近松の詞章省略・3の部分)

よそのむつごとねたましく。^{上地}それ覚へてかいつの事。かのはつ雪の朝^入

込に。^{ウ地}ねまきながらに送られし。大門口のうす雪も今ふる雪もかは

断したからなのではなからうか。

つぎの234の省略部分は上記の例ほど人形の有無を明確に指摘はできない。が、その中で2の「空にみぞれのくもりあられ。まじりに

ウ 吹木のは^{ハツミ}ひらり。」は、太字部分などやや描写的である。3では「せど

になをつむ十七八が^歌門に立たは忍びの妻かゑ。」と、十七八歳の娘が話しかけてくる部分も、描写的で実際の人形の所作があつたとしてもよい部分である。4の部分の

上 キン 引 人め の。ヤゆるしはあれど。ウキン 申是なふさりとは。わしが身とて

中 もまゝにはと末は涙にはてしなくの^{ヲクリ}べの。三つおりし^地ぼるにも

は、口語訳が

「しばらくは一目を……、ヤ許してはもらえても、もうし、これのう、そうはいつでも、わたしの身とてもそのままには……」と、あとは涙がとめどなく、言葉もとぎれ、延紙の三つ折をもしぼるばかりの有様であつた。

となり、登場人物が煩悶する箇所である。この部分を、人形を伴わず語つたとするとやや間延びの感がでるのではないだろうか。義太夫のように人形を使用し、視覚に訴えつつ語るのであれば、間延びせずこの苦悩の面もちが観衆に伝わただろう。ここを一中節で省略したのは、やはり人形という制約がなく、遊廓などで端物として語ることを一番の前提としての改訂なのではなからうか。人形を使うことも初世一中は確かにあつた。本曲をまとめた弟子半中も然りであろう。しかし座敷などでそれを用いないで語ることが、義太夫以上に頻繁であつたと考えられる一中や半中であつたとおもわれるために、そのような場にあつた改訂がまず優先的におこなわれたと考えたい。

「三度笠相合籠道行」の省略箇所は、このように初世一中の高弟である半中の活躍場所も、一中同様、遊廓の座敷が多かつたということをも

わせてくれるのである。

つぎに「ふた子すみだ川 狂女道行」の改訂例を見てみよう。これも「三度笠相合籠道行」のように、その活躍の場が関係してくる改訂だとおもわれるが、それとは省略態度が異なる。次節でみてゆきたい。

4.6 「ふた子すみだ川 狂女道行」(通し番号 86) 考

本語り物は、近松門左衛門作義太夫節『双生隅田川』(享保五年(1720)八月三日・竹本座(上演時期は宝暦版『外題年鑑』による)の道行部分の詞章を利用したものである。以下に両者の詞章を引用する。

〈近松門左衛門作義太夫節『双生隅田川』¹⁴〉

狂女道行

サイモン
はらひ清め奉るのしやかは。らごらの親仁にて。ウキン
エほていはから子

のおうばやく。ハル
ゑんまは鬼の旦那也。ウキン
扱日の本の我せんぞ。ハル
えんの

行者と申するはウキン
あつきあくまのむしくすり。ハル
今につたへて跡腹をや

ウキン
まぬ山ぶのきやうがいは日待。月待。きのへ子に。ハル
ふく徳延命長久

ウキン
の。代僧代待たい参り。ハル
人の願ひはかのへさるつちとのみは雲水に。

ハル
任する足の浦山を。ナヲス
すゝめて東にくだる也。フシ
又爰に子を失ひ歎の余

りに心乱れ。色
行衛を尋東路へ下る女性の候。見るめもいたはしく。詞

此二三日道つれしが。地
あれ／＼あれへ狂ふて正たいなや。ウ
暫これに待。ハル
色

受。謡詞
とひ慰て参らせんと思ひ候

¹⁴ 近松全集刊行会編『近松全集 第十一巻』収載『双生隅田川』、東京：岩波書店、1989.08.

ーセイ
 春のくる。空も霞かたきの糸。乱れて名をや。ながすらん。なふ道
引 詞
 行人に物とはふ。梅若といふ十二三のおさな子に。もしあひはなさ
 れぬか。何あひも見もせぬとや。

〈一中節〉

二子隅田川狂女道行

春もくる。そらもかすみのたきのいと。みだれて名をやながすらん。ノ
 フ道行人にものをふ。むめわかといふ十二三なおさな子にもしあひは
 なされぬかヤアなにあいも見もせぬとや。(※後略・以下も近松の詞章
 をほぼそのまま取り入れている。)

一中節では冒頭の近松の堅苦しい詞章の部分は省略している。これは硬派の義太夫節に対して、軟派系の柔らかな浄瑠璃といわれる一中節には、そのような詞章があまりそぐわないため、一中が嫌った部分と思われる。なお同様の省略は拙稿「他流派の語り物を改題改訂して成った正(丸)本考」¹⁵内で考証した、『けいせい大和絵姿三幅対』、『椀久末の松山』でも確認できる。

5. まとめ

以上をまとめると本稿における考察で取り扱った語り物は、すべて原拠は近松浄瑠璃であった。ただ詳細な考察は省くが、近松以外から取った語り物についても以下のような特徴が若干ながら認められる。たとえば、元禄八年(1695)の三勝半七の心中事件を取り扱った一中の端物は二種ある。一つ目の「62 あかね半七笠や三かつ心中道行」は、蔦山四郎兵衛作『三勝心中』(歌謡集刊『落葉集』(元禄十七年(1704)所収)からとったものであり、二つ目は「57 笠や三かつ下のだん」(出典未詳)である。が、どちらも海音作『三勝半七二十五年忌』(享保四年(1719)・豊竹座初演)と同様の描写、詞章がとりこまれている部分

¹⁵ 注5論文に同じ。

がある。また「75 誓願寺本地 けしこく道行」は、古浄瑠璃の『誓願寺本地』(寛文八年(1668)十月)の詞章を借りたものであるが、最終部分近くで、極めて僅かなものだが「と有いほりにやどをかり」と、一中では場面説明の詞章を省いている。この語り物は端物な爲、もっぱら座敷などで語ったと思われるが、近松作以外からでも同様の省略方法は確認できる。ただ先の近松浄瑠璃から取った語り物は特にそうだが、一中活躍期の内、後年成立の語り物に特徴的な部分が多いことがわかった。「78 大きやうじおさん死出の道行」の入れ替えなど、一中も年を追って自身の人気、立場も明確になった時期、はじめて近松作からの流用作に趣向を凝らしたようにも見受けられる。またピックアップしたそれ以外の作品は、すべて弟子の半中作のものであり、その手法は一中正本『椀久末の松山』冒頭で海音作の節事とはいえ、堅苦しく小難しい詞章部分を省略するなどにみられる、師匠一中のものと同様の手法もうかがえる。その中で語順を変え、特徴的な節を語り出しにもってくるなど、半中のある意味自由な手法も認められ、それは後に宮古路豊後と名を変え、豊後節を流行らせた才能の一端が一中の弟子であった時期からうかがえるとも言える。

ただし今後、オリジナル作の検討などをおこなわなければはつきりしたことは言えないが、近松作に依ったものなどは、ほとんどがそのまま詞章を流用しているところからみて、近松の美文というものを差し引いても、一中が詞章内容より語る節が聴衆を魅了し、詞章の改変などをする必要性がうすかったとかがえられる。また段物、端物では特にそうだが、語る場所が操り浄瑠璃を駆使する浄瑠璃小屋というより、座敷芸として人形もあまり使わなかったのか、人形の所作を感じる部分が詞章上省略されている点は、その活躍場所を検討する上で注目すべきものとなった。今後、オリジナル作品の検討に有意義な手段を得、その語り物内容のさらなる特徴を導き出したい。

引用書目

(一) 専書

- 近松全集刊行会編、『近松全集 第五巻』収載『心中万年草』、東京：岩波書店、1986.07.
- 近松全集刊行会編、『近松全集 第七巻』収載『冥途の飛脚』、東京：岩波書店、1987.11.
- 近松全集刊行会編、『近松全集 第九巻』収載『大経師昔暦』、東京：岩波書店、1988.09.
- 近松全集刊行会編、『近松全集 第十巻』収載『山崎与次兵衛寿の門松』、東京：岩波書店、1989.02.
- 近松全集刊行会編、『近松全集 第十一巻』収載『双生隅田川』、東京：岩波書店、1989.08.
- 鳥越文蔵校注・訳『近松門左衛門集 2』（『日本古典文学全集 44』）収載『山崎与次兵衛寿の門松』、東京：小学館、1975.08.
- 鳥越文蔵校注・訳『近松門左衛門集 2』（『日本古典文学全集 44』）収載『冥途の飛脚』、東京：小学館、1975.08.
- 諏訪春雄・小俣喜久雄、『一中節の基礎的研究 第一巻 正本集』、東京：勉誠出版、1999.01.

(二) 期刊

- 小俣喜久雄、「初期一中節段物集成立小考」、『東洋大学大学院紀要 第32集』、(1996.03) 83-103
- 小俣喜久雄、「初世都太夫一中の初回江戸下り」、『演劇研究会会報 第26号』、(2000.06) 3-15
- 小俣喜久雄、「翻刻 初期一中節の語り物（一）」、『東洋大学大学院紀要第36集』、(2000.02) 143-167 転載 『国文学年次別論文集』2000年版近世分冊、(2002.07) 668-680
- 小俣喜久雄、「翻刻 初期一中節の語り物（二）」、『東洋大学大学院紀要第37集』、(2001.02) 233-252 転載 『国文学年次別論

文集』2001年版近世分冊、(2003.09) 588-598

小俣喜久雄、「翻刻 初期一中節の語り物(三)」、『東洋大学大学院紀要第38集』、(2002.02) 359-376 転載 『国文学年次別論文集』2002年版近世分冊、(2004.09) 601-610

小俣喜久雄、「一中節丸本『伝授小町』考-角太夫節『七小町』との比較を中心に-」、『楽劇學12号』、(2005.03) 18-31. (大葉大學九十三學年度個人型研宄專題計畫主持人・計畫名稱「一中節基礎研究—探討一中節之「詞」及初世都太夫一中之人物像—」(ORD-9329) 成果中的一部分)

小俣喜久雄、「一中節丸本考-他流派の語り物を改題改訂して成った丸本-」、『歌舞伎 研究と批評38号』(2006.12)

